歌かるたの成立と細川家

――付、三浦綾子作『細川ガラシャ夫人』――

吉　海　直　人

【キーワード】歌かるた・百人一首・細川家・扇型歌留多

一、問題提起

百人一首かるたは、日本の伝統的な古典文化として知られている。もちろん「かるた」は外来語（ポルトガル語）であるが、外来のものが日本で独自の発展を遂げるというのは、まさに日本文化の特徴の一つといえる。

室町後期に伝来したかるた（南蛮カルタ）は、プレイング・カード（いわゆるトランプ系のもの）であった。それがそのまま読みかるた・めくりかるたとして日本に定着していった。これは賭博用（男性用）のカード遊びであったので、しばしば禁止令が出ている。それとはまったく別個に、日本固有の歌かるたが発明された。その歌かるたの成立は、おおよそ江戸初期頃と考えらえている。ただし遊戯ということで、一等資料が欠落しており、それ以上はっきり論じることはできていない。

もちろん南蛮カルタから、いきなり歌かるたが誕生することは考えにくい。そこで江戸時代以降、日本古来の「貝覆い」と、外来の「カルタ」が融合して誕生したと合理的に説明されている。それは一種の誕生神話であるが、それを否定する材料も不足しており、現状ではその説を肯定することも否定することもできていない（膠着状態）。そのため歌かるたの成立は、きちんと説明できないまま現在に至っているのである。証拠が提示

できない以上、すべては仮説ということにならざるをえないからである。

二、歌かるた誕生に関わる資料その1

そこで本稿では視点を変えて、これまでに知られているかるた誕生に関わりそうな資料三点を紹介し、その分析を通して私見を述べてみたい。まずは宝暦頃刊『歓遊桑話』[1]という珍しい版本である。これを最初に紹介したのは山口吉郎兵衛氏『うんすんかるた』（リーチ）であった。

その『うんすんかるた』の「歌カルタ」創始の資料として、

抑本朝にて其始、源氏絵会貝合せ初り、其後中院道村公、小倉色紙歌合せ賀留多、中立売麩屋何某に命じて作らせ、次第追て今専業を所為、其職の渡世とす。（113頁）

と記されている。日本には古来、源氏絵の描かれた貝合せ（貝覆い）があり、そこから発展して歌かるたが作られたという流れの上で、公家の中院道（通）村（一五八八年～一六五三年）が麩屋何某に命じて「小倉色紙歌合せ加留多」（百人一首かるた）を作らせたと説明している。貝合せからの流れはさておき、ここでは自作ではなく職人にかるたを作らせており、それが専門のかるた処へと発展していったと読める。

ここに製作させた年代は記されていないが、宮武外骨の『賭博史』にも通村の『塵芥略記』元和二年二月十四日条から、

召経師藤蔵（カルタ、石川主殿頭所令新刊也、南蛮ノアソビ物也）令摺之（18頁）

と引用されている。これは石川忠総が経師藤蔵にトランプ系の天正カルタを木版で刷らせたという記事である。天正カルタが版行できるのであれば、歌かるたにも応用できるであろうから、元和期が歌かるた（しかも木版かるた）誕生の時期ということになりそうだ。[2]そしてその両方に名前の見えている中院通村こそは、歌かるたの創始者の一人と考えられる。

なお通村は、細川幽斎から二条流の古今伝授を受けた中院通勝の息であり、自身は後水尾院から古今伝授を受けている。しかも母親は幽斎の養女なので、細川家とは親戚関係の親しい間柄であった。江戸初前期における中院家の百人一首注釈・講釈は、研究史でも看過できないものである。

三、歌かるた誕生に関わる資料その2

二点目には、細川家所蔵の『当家雑記』があげられる。これ

は中村幸彦氏が紹介されたものである。[3] その中に「しうかく院」が古今集のかるたを考案したことなどが書かれている。これはかるたの成立を論じる上で非常に貴重な記事だと思われるので、やや長くなるが全文引用しておきたい。

世にうたかるたと申し候てはやり申し候。さいだめてしうかく院様あそばされ候うたのふだにて御ざ候はんとぞんじ候。まへは古今のふだと申し候て、うたの五文字ばかり御かかせ被成、かいおおいのごとく、だしとちとにあそばし御取りなされ候を、しうかく院様五もじばかりをぢとだしとにしては、あまりめなれして、御なぐさみに覚しめされずとて、かるたのごとくかみをあつくいため紙に御こしらへ被成、大きさも大かるたほどに、かみの色きとしろとにあそばされ、しろには上のく、きには下のく御かかせ被成、かいおおいのごとく御取被成候。かるたもまへはいま時のより大きに御ざ候。又いたにてもちいさくかき申し候。いくとをりもあそばされ、京にて御まん様へもしんじられ候。此のちかみの御ふだのごとくふだばかりこしらへ、うたをかき候はでうり申し候を京にて見申し候。そののちは又うたをかき候てうり申し候とみえ申し候。何にてもみやこにはやり申し候ほどのことは、御まん様よりしうかく院様へ仰しんじられ候。御めにかけられ候物はくだり申し候が、此うたかるたばかりはつゐにしんじられ候はず、仰せられ候てもまいり申さず候に付、しうかく院様あそばされ候御ふだは、みやこにもはやり申し候物とぞんじ候。

（著述集第十三巻186頁）

これによれば、歌かるたはしうかく院の古今の札から考案されたことになる。最初は歌の初句・三句だけが書かれた暗記カードのような札だったが、後にこれを上の句と下の句が書かれたかるたに仕立てている。料紙は上の句札が白で、下の句札が黄色と色分けされている。上の句札と下の句札の色（料紙）を変えるのは、その後のかるたにも継承されている。また板札にも書いたとあるので、これが板かるたの初出となる。

当時、歌かるたはまだ京都でも商品化されておらず、だからこそしうかく院は娘のお万に贈ったわけだが、これによって京都でも白札が売られるようになった。さらに歌を書いたかるたも商品化されたというのである。これは細川家が歌かるたを創始したことを宣言しているようにも読める。これを信じれば、しうかく院こそは歌かるたの創始者ということになる。

こんな重要人物でありながら、長らく「しうかく院」が誰だかわからなかった。中村氏も特定されていなかった。最近になってようやく、藤島綾氏が細川忠興（三斎）の側室・秀岳院（明智光秀の家臣明智光忠の娘小也也）であることを特定された[4]。その秀岳院の娘がお万であり、元和元年（一六一五年）に公家の烏丸光賢（みつかた）に嫁いでいる。そうなると秀岳院がお万にかるたを贈ったのは、元和元年以降ということになりそうだ。ここでも元和期成立が浮上した。なお光賢の父光広は書家として有名で、百人一首の写本も残している。

四、歌かるた誕生に関わる資料その3

三点目の資料は、文書ではなく細川忠興自筆の扇面加留多（百人一首）の現物が存していることである。これは現在細川家が所蔵しており、時々展示もされている。これについて作家の三浦綾子氏は、『細川ガラシャ夫人上』[5]の中で、このかるたは妻の玉にプレゼントするために忠興が三年もかけて手作りしたものであり、「現在も細川家に伝えられて数枚が残っている」と書かれている。これはあくまで小説の記事なのだが、これが安易に史実と結び付けられているようである。

明智玉は一六〇〇年の関が原の合戦の二ヶ月前に亡くなっているので、かるたはそれ以前に作られたものとなる。もしそれが事実ならば、このかるたこそは資料的に現存最古のかるたということになる。しかしながら展覧会の図録では十七世紀成立とあるので、玉が亡くなった後に作られたものということになる。枚数も数枚どころか一九九枚残っているとのことである（一枚欠）。仮に最古のかるたが扇型であったとすると、蛤型から方形へと変化する貝覆い説とはやはり齟齬することになりそうだ。

以上の三点がかるたの成立にかかわる資料である[6]。ここまで見てきて、ここにあがっている資料のすべてに細川家が関与していることに気付いた[7]。要するにどの資料に依拠しても、歌かるたは細川家に関わるところで誕生していることになりそうだ。それは細川幽斎が古今伝授の第一人者であり、後水尾院・中院通勝・烏丸光広などの公家とも師弟関係を結んでいるからであろう。

それとは別に、『歓遊桑話』に「源氏絵会貝合せ」の流れで「小倉色紙歌合せ加留多」が作られたとあった。なるほど貝覆いの絵に源氏絵が多いのは事実である。蛤型のかなり古い「源

氏物語かるた」も伝存している。また『当家雑記』にも「かいおおいのごとく」と書かれており、歌かるたは「貝覆い」をヒントにして考案されたと考えられていたことになる。もちろん出し貝・地貝に似せて上の句札・下の句札が作られたとしても、貝の形や模様でマッチする貝を探す貝覆いと、上の句から下の句札を探す歌かるたでは、遊び方（教養度）に大きな違いがある。

これまでの貝覆いから歌かるたが誕生したという説では、貝覆いの貝の裏に歌の上の句と下の句を書いた「歌貝」の存在に言及されることが多かった。ところが貝覆いの中に、「歌貝」が含まれる例は見たことがない（例示されたこともない）。それが貝覆い説の弱点ともいえる。幸い貝覆いとは別に、中御門宣胤の日記（文明十三年三月十日条）や三条西実隆の『実隆公記』（文明十八年十二月二十六日条）に、貝裏に歌を書いた「貝歌」のことが書かれている（「歌貝」と「貝歌」とは異なる）。これなら歌かるたに近いが、それでも「貝歌」でかるたのように遊ばれたという事実も聞いたことがない。

もともと日本には色紙に和歌を書く伝統があった。それに佐竹本三十六歌仙絵巻のような歌仙絵も存在するし、近世初期には歌仙の絵馬も大量に作られている。そうなると色紙や歌仙絵を小型化すれば、たちまちかるた札ができあがる。『当家雑記』には「かるたもまへはいま時のより大きに御ざ候」とあって、秀岳院がこしらえたかるたは大きめのサイズだったようだ。

まとめ

ここまで三点の資料を中心に、歌かるたの起源説を再検討してみた。『当家雑記』以外は『うんすんかるた』に紹介されている資料である。[8] また『賭博史』には中御門宣胤や三条西実隆の日記も引用されており、いかに『うんすんかるた』が資料的に重要であるかがわかる。しかも貝覆いとは別に「歌貝は歌カルタの源流か」として、

兎に角歌貝は此時代に始めて顕れたものかどうかも不明であるが、応仁の戦乱後に行われ、或は歌カルタ、詩カルタの源流となったものかも知れぬが、広く流行するに至らなかったのであろう。後世に至っても矢張り同様であったと見えて、貝覆の貝は相当数伝存しているが、内部は絵のものばかりで詩歌の書いてあるものは殆んど見受けられぬようである。（112頁）

と述べられている。ここで貝覆いと貝歌が別個に捉えられていれば、貝歌から歌かるたが誕生したという説が浮上していたに違いあるまい。そのことは山口氏も、

外来かるたに倣って従来の歌貝の形質を改めたる「歌カルタ」が出現した。しかしその創案者及年代は不明である。（113頁）

としておられる。

結論として、かるたの成立は今ある資料では一つに収束できないということになりそうだ。そもそも「かるた」という言葉はポルトガル伝来、札の二分割は貝覆いあるいは貝歌からの発展、札そのものは色紙や歌仙絵からの応用なので、むしろ複合されることで成立したと考えるのがよさそうである。

通説のように「貝覆い」から歌かるたができたとはいいがたい。[9]それでも「貝覆い」とまったく無関係とも断言できないのだが、歌かるたの遊び方が確立し、上の句を詠みあげる読み手が登場することで、「貝覆い」とは完全に袂を分かった。読み手の存在こそは、歌かるただけの大きな特徴といえる。

本論では二条流の古今伝授の継承者である細川家周辺に歌かるた成立の資料が集中していることを述べた。百人一首の享受史としてはもっとも妥当な説ではないだろうか。これが今考えているやや複雑なかるたの成立私論である。

〔注〕

（1）山口吉郎兵衛氏の『うんすんかるた』（リーチ）では『歓遊桑話』として紹介されている。その後、著者が桑林軒であることなどから『歓遊桑話』と改められている。また当初は滴翠美術館に所蔵されている版本しか知られていなかったが、現在は大東急記念文庫にも所蔵されていることがわかっている（東北大学狩野文庫の目録にも見られる）。また濱田義一郎氏編『天明文学―資料と研究』（東京堂出版）一九七九年に、佐藤要人氏が翻刻を掲載しておられることを知った。

（2）山口氏は「歌カルタの異名」で、

歌カルタと云う言葉も初期より通用していたらしいが、島原乱後排外思想の勃興につれて、又慶安一六四八、承応一六五二、万治一六五八に亘り度々天正カルタ禁止令が発せられて歌カルタが其代用として天正カルタ風に銘々に札を配る技法によりて賭博に使用せられることがあったのでカルタと云う言葉が忌まれた。（113頁）

と説明しておられる。歌カルタが天正カルタの代用として賭博に用いられたというのは確かなのであろうか。

（3）中村幸彦氏「歌がるた」『中村幸彦著作集十三』（中央公論社）一九八四年七月参照。

（4）藤島綾氏「二枚の絵札―伊勢物語かるたをめぐって―」国文学研究資料館紀要文学研究篇42・二〇一六年三月、同「かるたの中の伊勢物語」百舌鳥国文27・二〇一六年三月参照。

（5）三浦綾子氏『細川ガラシャ夫人上・下』（新潮文庫）一九八六年。

（6）その他、現存するかるたとして滴翠美術館所蔵の「道勝法親王筆かるた」は一六二〇年以前成立とされており、三池カルタ・歴史資料館所蔵の「蛤型源氏物語かるた」は一六〇〇年頃とされている。総合的に考えると、一六〇〇年初頭が歌かるた成立期となりそうである。なお扇面歌留多・小倉色紙歌合せ加留多・道勝法親王筆かるたは百人一首、秀岳院が作ったのは古今集かるた、三池カルタ・歴史資料館が所蔵している蛤型かるたは源氏物語となっている。今のところ伊勢物語だけ古いかるたが発見・報告されていない。なお、この中で歌仙絵を伴っているのは道勝法親王筆かるたのみであり、他はすべて絵のない色紙型かるたである。百人一首の歌仙絵は成立が遅く、角倉素庵が刊行した絵入版本（元和寛永頃）が嚆矢とされている。道勝法親王筆かるたの歌仙絵との類似も指摘されているので、成立はもう少し下るのではないだろうか。

（7）江橋崇氏は「細川家周辺は、「小倉百人一首」歌留多の発祥としては、一番可能性の高い人間集団である」（「歌留多になった小倉百人一首」『百人一首万華鏡』思文閣出版・二〇〇五年一月）と示唆しておられる。また藤島綾氏も「近世初期の細川家のかるたとの関わりをうかがわせる」（「二枚の絵札」注（3論文）と述べておられる。確かに細川幽斎は古今伝授に欠かせない人物であり、後陽成天皇から古今伝授を途絶えさせてはならないとの仰せがあって、幽斎は籠城死を免れている。二条流歌道を継承する幽斎であるから、古典講釈だけでなくかるた成立にまで深く関わっていたとしておかしくはない。

（8）その後、山口氏は「日本のかるた」古美術69・昭和59年で真っ先に『当家雑記』を紹介されている。

（9）山口氏も「歌カルタの形質」で、

駒形原形説は諸流皆主張しているが結局、外来賭博用品の如き長方形は好ましからず、元来が歌貝であるから貝形に似たる将棋駒形にするべしと云う故実家の「あらねばならぬ」を「ある」にしたものらしい。　（114頁）

と賭博用の天正カルタとの差異化をはかるために、駒形や貝形原形説が主張されたと分析している。

付、三浦綾子著『細川ガラシャ夫人』

一

細川忠興に嫁いだ明智光秀の娘玉は、カトリックの信者であった（洗礼名はガラシャ）。そのことは夙に知られており、それもあって三浦綾子は、その玉を主人公にした『細川ガラシャ夫人上下』（主婦の友社・一九七五年刊）という小説を書いている。

ではこの小説の上巻「丹後の海」の中に、かるたの話が出ていることはご存じだろうか。美貌の玉を愛する忠興が、手製のかるたを三年がかりでこしらえて、玉にプレゼントするところである。大事な資料なので、次にその場面を引用する。

二

珍しく忠興は冗談をいった。これはよくよく機嫌がよいにちがいない。何があったのだろうと戸惑う玉子に、

「実はのう。そちにもう一つ見せるものがあるのだ」

と、忠興は楽しげに書院棚の文箱をあけた。それは九曜の紋のついた黒塗りの大きな文箱で、決して手をふれてはならぬと言われていた文箱であった。

「ま、何でございましょう」

玉子もやさしく首をかしげた。

「これじゃ」

「まあ、きれいな……。これは歌留多ではございませぬか」

厚紙に金箔を貼った扇型のかるたが沢山、文箱から出された。

「どうだ？お玉」

得意げに忠興は玉子を見た。玉子はお長をそっと下に置き、

「何とみやびやかな！」

玉子は目を見張って、その一つを手のひらにおいた。

「これは、いったいどなたさまよりの賜り物……」

「もらったものではないわ。実はな、そなたを娶った時から、ひまひまに、こっそりわしが作ったものだ」

照れたように笑う夫の顔を、玉子はまじまじと見て、

「まあ、それでは……この金箔も殿が？」

「おう、わしが貼った。張り方は、以前に屏風師に習ってあった。そなたを喜ばせようと手がけたのが三年前。だが、戦さつづきで、なかなか時間もとれぬ。ようやく先程百枚つくりあげたわ」

「殿！」
玉子の白い頬に、涙がつーっと走った。思いがけない夫の優しさだった。
「もったいのう……ござります」
「おう、喜んでくれるか。わしもうれしい。そんなに喜んでくれるとは思わなんだ」
玉子は、一枚一枚をその形のよい指で、そっとつまむようにして持った。金箔の上に、忠興の見事な筆で百人一首が書かれている。
君がため惜しからざりし命さへながくもがなと思ひける哉
諸共に哀と思へ山桜花より外に知る人もなし
低く読みながら、玉子は幸せな思いに満たされていた。
結婚以来三年、忠興は優しいと思えばいら立ち、怒っていると思えば、俄かに激しく愛撫する夫で、どうにも気心が捉えられなかった。いつも、何か気まぐれに扱われているようで、誇り高い玉子は、内心腹にすえかねることもあった。何かしみじみと、二人の間に通うもののない淋しさがあった。
その淋しさ、うつろさが、やがては忠興に抱かれながら、高山右近の幻影に抱かれるという不倫な思いに、玉子を誘ったのかも知れなかった。だが、いま、忠興手作りの優雅なかるたを手にして、玉子の心はやさしく解きほぐされていく思いだった。妻の自分を喜ばせようとして、激しい戦さのひまひまに、ひそかに厚紙で型をとり、金箔を貼りつけ、細字を書きこんでいく忠興の姿が、ほうふつとして玉子の瞼に浮かんだ。
「一生、わたくしの宝といたします。殿、ありがとうございます」
ふかぶかと両手をついて礼をいう玉子を、忠興は満足そうにうなづいて眺めた。
「さぞかし根気のいるお仕事と存じまする」
玉子は飽かずに一枚一枚かるたを眺めて行った。この百枚を、三年かかってつくってくれたと思えば、あだやおろそかには思われぬ。その様子を見て、忠興もまた玉子の真心がじかに伝わる思いだった。
類ない美貌の女性であるとの思いは、初めて玉子を見て以来、変りはしなかったが、しかし心根はいかにも冷たい女に思われた。女性に似合わず、もの事に批判的で、夫の忠興のなすこと言うことに、冷笑を浴びせているように思われることが間々あった。それがいま、こうして、涙をもって深々と礼をいい、

百枚のかるたの一枚をもおろそかにせず、次々と興深げに見つめてくれている。いま玉子は、自分の気持をあやまりなく受けとめてくれているのだ。忠興はしみじみうれしかった。

玉子の美しさ、賢さに圧倒されて、忠興は最初から劣等感を抱いていたのだ。が、この日以来、忠興と玉子の間にあった目に見えぬ垣は、取り払われたようであった。それは、熊千代お長という愛らしい二人の子が恵まれても、なお取り払い得ない垣であったのだ。

なお、この忠興手づくりの百人一首は、現在も細川家に伝えられて数枚が残っている。

三

私は百人一首・かるたが掲載されている文学作品を追いかけていて、ようやくこの作品にたどりついた。歌の引用まであるので、百人一首享受史の貴重な資料の一つといえる。

このかるたは下巻にも再度登場している。明智光秀が豊臣秀吉軍に敗れたことで、忠興が玉をひそかに山中に隠し住まわせるところである。「味土野の春」には短く次のように出ている。

朝食のあと、玉子は忠興が自分のために、三年の歳月を費やして作ってくれたかるたを手に、一枚一枚読んでいた。金箔を貼った扇形の優雅なかるたである。

百人一首のどれもが、しみじみと心に沁みた。自分がこの山奥に住んでいるために、心に沁みるのかと思いながら、そのあまりにも淋しく切ない歌の多いのに、玉子は今更のようにおどろいていた。

玉子は忠興と別れて山中に隠遁する際、かるたを持っていったのである。そしてもう一個所、「人の心と天の心と」にも短く引用されている。

忠興は玉子のために、扇形のかるたに一枚一枚金箔を貼り、心をこめて百人一首をつくってくれた。

『細川ガラシャ夫人』には前述のように百人一首の歌も引用されているが、忠興手作りの扇形百人一首かるただけでも都合三回引用されている。しかもその小説の記述に呼応するかのように、現在まで細川家には忠興筆とされる扇面歌留多が伝来していた。そのため小説の信憑性が保証されているように受け取られている。しかしこの記述を鵜呑みにはできない問題がある。

一つは百人一首かるたを「百枚」としていることである。かるたに詳しくない人でも、かるたは二百枚で一組になっている

ことは知っているはずである。しかも札に書かれた百人一首が、

君がため惜しからざりし命さへながくもがなと思ひける哉

諸共に哀と思へ山桜花より外に知る人もなし

と引用されている。これは奇妙である。というのも、江戸時代のかるたは上の句札と下の句札に分かれているのであるから、普通だったら上の句か下の句しか引用できないはずである。あるいは現代の活字かるたを頭に浮かべて、歌一首を書いてしまったのかもしれない。しかし歌一首が書かれるようになったのは明治以降である。いずれにしても百枚では揃いのかるたにはならない。もちろん百人一首が書かれた扇面色紙（かるたとは別）なら問題ない。

もう一つ、細川家には確かに扇面歌留多が伝来している。その図録の説明を見ると、十七世紀成立とされている。明智玉（細川ガラシャ）が亡くなったのがちょうど一六〇〇年であるから、もしこれが本当に玉にプレゼントされたものであれば、成立は十六世紀後半とされるはずである。そうなっていないということは、これは玉にプレゼントされたかるたではないことになりそうだ。むしろ玉に贈られたかるたというのは、三浦綾子の創作ではないだろうか。小説では「数枚が残っている」とあったが、この扇面加留多は一九九枚残っているとのことである。

もし小説通りであれば、その方がかるたの歴史にとってはありがたい。仮に忠興が玉に手作りのかるたをプレゼントしていたとすると、そのかるたは最古のかるたの可能性が高くなる。現存最古のかるたは、一六二〇年以前の道勝法親王筆かるた（滴翠美術館所蔵）とされているが、それよりも成立が四十年程遡るからである。しかもその形が扇面となると、かるた成立期においては形が長方形に固定していなかったことになる。だからといって、そこから蛤型が導かれることもあるまい。これを踏まえると歌かるた成立論はますますややこしくなってしまいそうだが、考える資料が増えたことは素直に喜びたい。